烈火の太洋３

ラバウル進攻

横山信義
Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

●頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の→キーを押して下さい。
もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

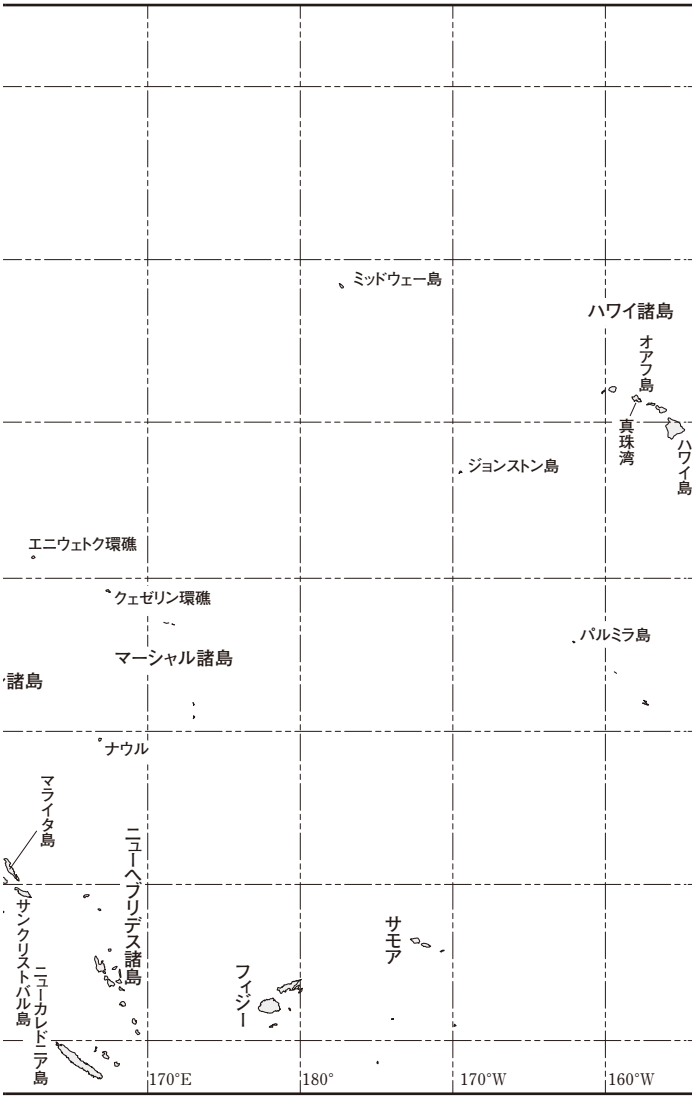
●画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみて下さい。

●本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

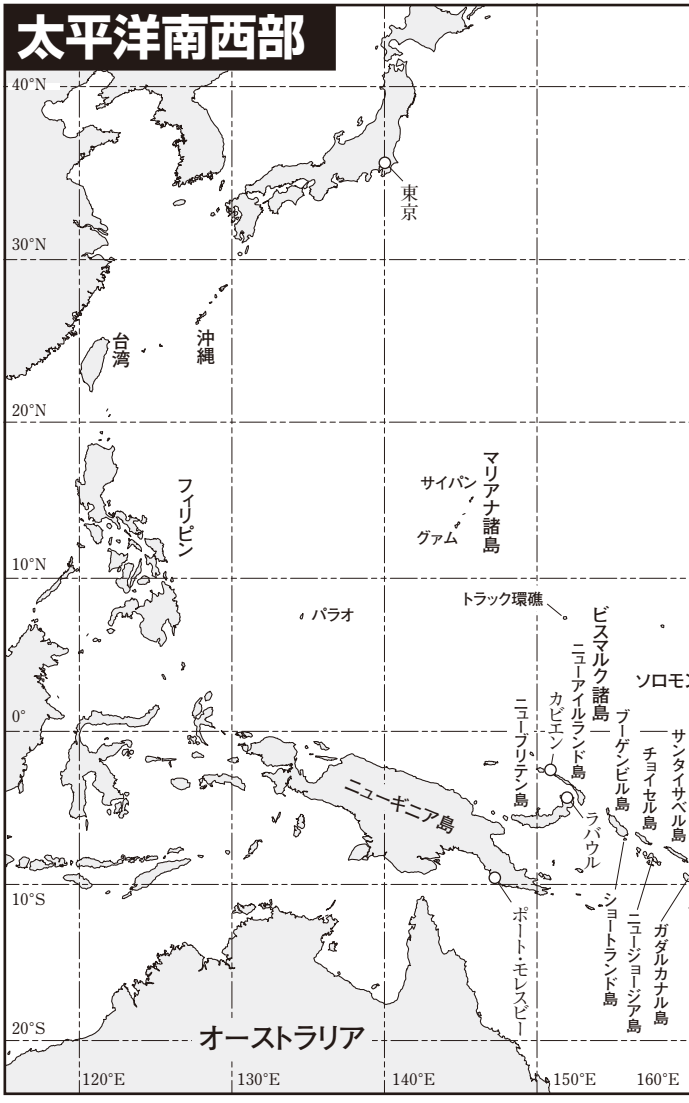
扉　　画　高荷義之
地図・図版　安達裕章
編集協力　らいとすたっふ

目次

第一章　南方の脅威　9
第二章　戦線拡大　37
第三章　機動部隊始動　61
第四章　ビスマルク諸島沖海戦　97
第五章　ソロモンに待つもの　159
第六章　井上成美の献策　207

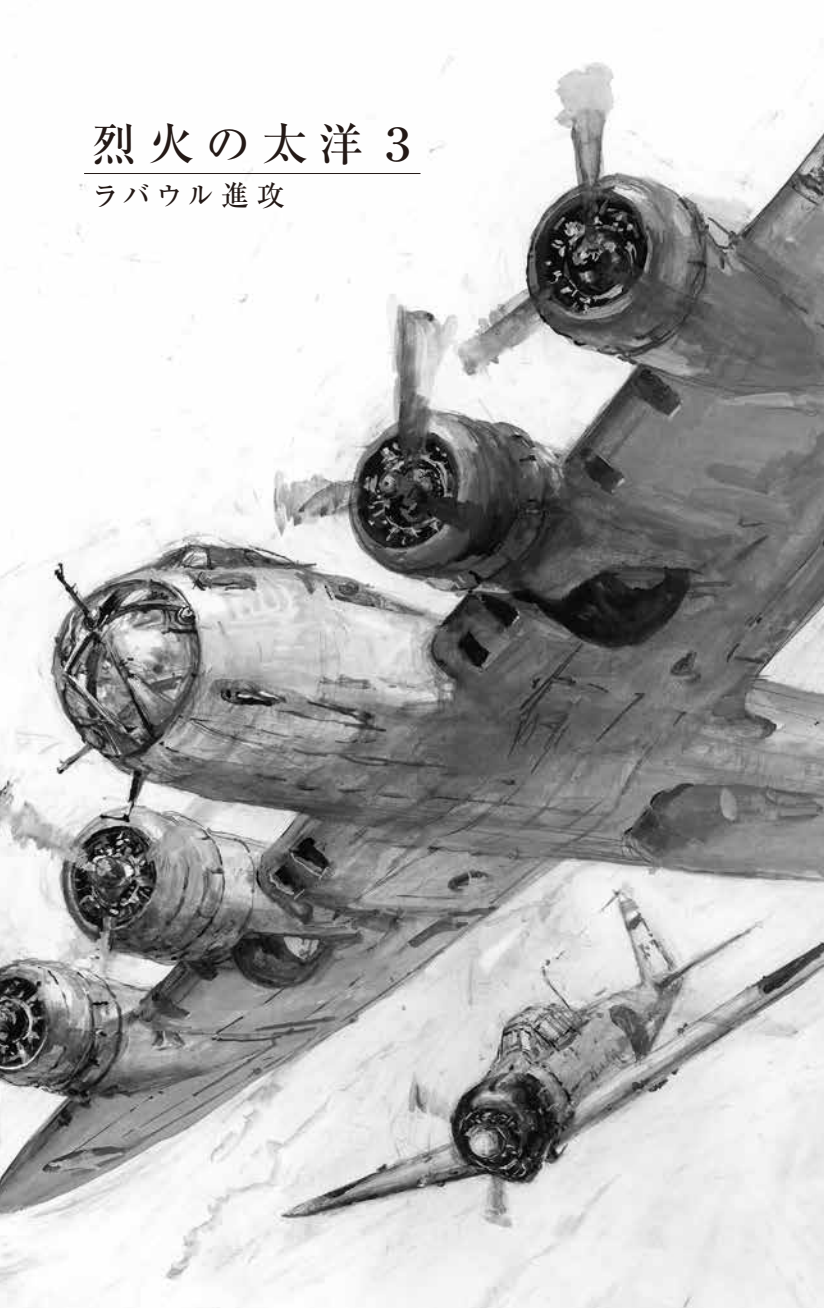

ミッドウェー島
ハワイ諸島
オアフ島
真珠湾
ハワイ島
ジョンストン島
エニウェトク環礁
クェゼリン環礁
パルミラ島
マーシャル諸島
諸島
ナウル
マライタ島
ニューヘブリデス諸島
サンクリストバル島
ニューカレドニア島
フィジー
サモア
170°E
180°
170°W
160°W

太平洋南西部


40°N
30°N
20°N
10°N
0°
10°S
20°S
120°E
130°E
140°E
150°E
160°E
東京
台湾
沖縄
フィリピン
マリアナ諸島
サイパン
グアム
パラオ
トラック環礁
ビスマルク諸島
ニューアイルランド島
カビエン
ニューブリテン島
ブーゲンビル島
ラバウル
ニューギニア島
ポート・モレスビー
ショートランド島
ソロモン
サンタイザベル島
チョイセル島
ニュージョージア島
ガダルカナル島
オーストラリア

烈火の太洋 3

ラバウル進攻



第一章　南方の脅威

1

六機の零式艦上戦闘機が高度三〇〇〇まで上昇したとき、敵機は既にトラック環礁の内側に侵入していた。

機数は四機だ。

南水道の上空を通過し、北上して来る。

春島の西側にある春島錨地――戦艦、空母、重巡といった大中型艦用の停泊地を目指しているようだ。

「手前での捕捉は無理だな」

零戦六機を指揮する第三航空隊の諏訪浩特務少尉は、敵機を見上げながら呟いた。

敵機の侵入高度は六〇〇〇メートル。

零戦がその高度に到達するまで、あと四分ほどかかる。

最新鋭機であっても、高度六〇〇〇まで一気に翔上がれるわけではない。緩やかな上昇角で、数分をかけて上がらなければならないのだ。

高度が上がるにつれ、機影が拡大する。

両翼に装備するエンジンは、左右各二基。帝国海軍の九七式大型飛行艇と同じく、四発の大型機だ。

三空の上位部隊である第二三航空戦隊司令部から知らされた、米軍の新型重爆撃機ボーイングB17〝フライング・フォートレス〟――「空の要塞」の異名を持つ機体かもしれない。

高度が四〇〇〇を超えたところで、敵機とすれ違った。

諏訪は後続機に合図を送り、左旋回をかけた。

上昇しつつ、敵機を追う形になる。

「何故、南から……？」

諏訪の脳裏を、疑問がよぎった。

昨年――昭和一五年一二月一一日、マーシャル諸島で敵の動きを探っていた伊号潜水艦が、敵四発重爆の編隊を発見した。

現在マーシャル諸島は最西端のエニウェトク環礁まで含め、全島が米軍の占領下に置かれている。

エニウェトクからトラックまでは約五〇〇浬。同地に敵重爆が進出すれば、トラックは敵の空襲圏に入る。

事態を重視した大本営は、トラックの防空態勢強化を決定し、零戦の装備部隊を優先的に配備した。

トラックの警備を担当する第四艦隊も、麾下の駆潜艇や哨戒艇を環礁の東方海上に展開させ、敵機の早期発見に努めると共に、環礁の水道入り口に設置した砲台に人員を増強した。

盟邦ドイツから導入を進めている電波探信儀は、トラックにはまだ設置されていない。当面は、人の目と耳が頼りなのだ。

ところが敵重爆は、すぐにはトラックに来襲しなかった。

偵察機がエニウェトクに飛んだが、偵察写真は重爆の姿を捉えていない。

「伊号潜水艦の報告は、誤報だったのではないか」

二三航戦司令部や第四艦隊司令部では、このような推測も囁かれたが、警戒態勢は緩めなかった。

一月半ばを過ぎた今、その重爆がトラック上空に姿を見せている。

ただし、敵はマーシャル諸島がある東方ではなく、南方から――思いもかけない方角から来襲したのだ。

諏訪機の高度計は五〇〇〇メートルを指し、なお回り続けている。

コクピットの中は、かなり寒い。富士山の頂上より、一〇〇〇メートル以上も高く上っているのだ。熱帯圏に属するトラックといえども、気温は大幅に低下し、操縦桿を握る手がかじかんで来る。

「くそったれ！」

諏訪は、罵声を吐き出しながら上昇を続けた。

高度差が縮まり、敵機がごつごつした形を持つことが分かって来る。胴体の複数箇所に見える瘤のようなものは、防御用の旋回機銃座であろう。

「B17だ。間違いない」
諏訪は確信した。
敵機は、まさしく「空の要塞」だ。旋回機銃座の一つ一つがトーチカのように見える。
その「空の要塞」は、春島錨地の上空を通過している。
投弾があるか、と身構えたが、弾着の飛沫が上がることはない。B17群は、針路、速度とも変えることなく、錨地の上空を通過する。
環礁北側の艦隊作業地上空で、敵編隊が大きく右に旋回した。
「春島か！」
諏訪は、敵の狙いを見抜いた。
現在、連合艦隊の主だった艦艇は、内地で修理や整備の真っ最中であり、トラックに在泊しているのは、第四艦隊の指揮下にある警備用の艦艇のみだ。
B17は、めぼしい目標が錨地になかったため、春島の飛行場や防御陣地を爆撃するつもりなのだ。
諏訪はバンクして、後続機に合図を送った。
右旋回をかけ、春島の上空に占位した。
現在の高度は六二〇〇メートル。B17よりも、有利な位置を占めたのだ。
四機のB17は編隊を崩すことなく、春島上空に侵入する。
零戦の姿が見えていないはずはないが、動きに変化はない。
「まずは槍合わせと行くか」
諏訪が合図を送ると、零戦隊が二手に分かれた。
諏訪が率いる第二小隊が右に、香取晃太郎航空兵曹長が率いる第三小隊が左に、それぞれ旋回する。
一個小隊三機で、一機のB17に狙いを定め、前上方から突進する。
反航する形を取っているため、距離が詰まるのは早い。照準器の白い環が捉えた機影が、凄まじい勢いで膨れ上がる。
諏訪が発射把柄を握るより早く、B17の胴体上面

と側面に真っ赤な閃光が走った。
一機だけではない。二機が同時に銃火を放ち、何条もの火箭が飛んで来た。
「……！」
諏訪は、声にならない叫びを上げた。全ての射弾が自機に向かって来るように見え、思わず操縦桿を右に倒した。
零戦が右に傾き、B17の編隊が左に流れる。
諏訪は、発射の時機をつかめない。敵弾に捉えられることはなかったものの、こちらは一連射を放つことすらできなかった。
後続する二機――安西満一等航空兵曹の二番機、永瀬三郎三等航空兵曹の三番機も、一発も発射することなく、敵機の射程外に逃れている。
二小隊は、B17群の後方に抜ける。
左の水平旋回をかけ、後ろ上方から攻撃する態勢を取る。
香取の第三小隊は、二小隊よりやや遅れて、敵編隊の後ろ上方に占位する。
諏訪は、エンジン・スロットルをフルに開いた。
中島「栄」一二型エンジンが猛々しく咆哮し、零戦が加速された。安西機、永瀬機の追随を確認し、正面に視線を戻す。
B17の尾部が迫る。
巨体に似合わず、速度性能は高い。零戦との速力差は、時速七、八〇キロといったあたりだ。
（九六艦戦だったら追いつけないな）
機種転換前に乗っていた機体を思い出すが、両目は敵機を見つめている。
B17の尾部と胴体上面が光った。
無数の曳痕が殺到して来たときには、諏訪は機体を傾け、回避の動きを取っている。青白い曳痕の連なりが翼端や風防の脇をかすめ、後方に抜ける。
よく見ると、敵弾は七・六二ミリのようだ。防御火力は意外に小さいのかもしれない。
諏訪は、右、あるいは左にと、小刻みに旋回を繰

り返しつつ、B17との距離を詰めた。九六陸攻のそれに比べ、一回り大きな水平尾翼、垂直尾翼が、目の前に迫った。

頃合いよし、と見て、発射把柄を握った。両翼に発射炎が閃き、二条の太い火箭がほとばしり、狙い過たずB17の尾部を捉えた。

太い火箭が吸い込まれ、きらきらと光る破片が舞い散った。尾部の機銃座が沈黙した。

（してやったり）

諏訪は機体を左に滑らせ、離脱する。

安西機、永瀬機が、続いてB17に銃撃を浴びせる。

三機合計六丁の二〇ミリ機銃による銃撃だ。

四発の大型機といえども、ひとたまりもなく墜落すると諏訪は確信していたが――。

「墜ちない⁉」

諏訪は我が目を疑った。

第二小隊が狙ったB17は、速力を落とすことなく飛び続けている。

尾部銃座は沈黙させたが、他の被害はないようだ。

第三小隊が狙った機体も速力を落とさず、飛行を続けている。

「ならば！」

諏訪は操縦桿を手前に引き、今一度上昇した。

安西機、永瀬機を従え、B17群の後ろ上方に占位した。

四機のB17は、悠然と飛んでいる。

墜とせるものなら墜としてみろ――そんな挑発をしているように感じられる。

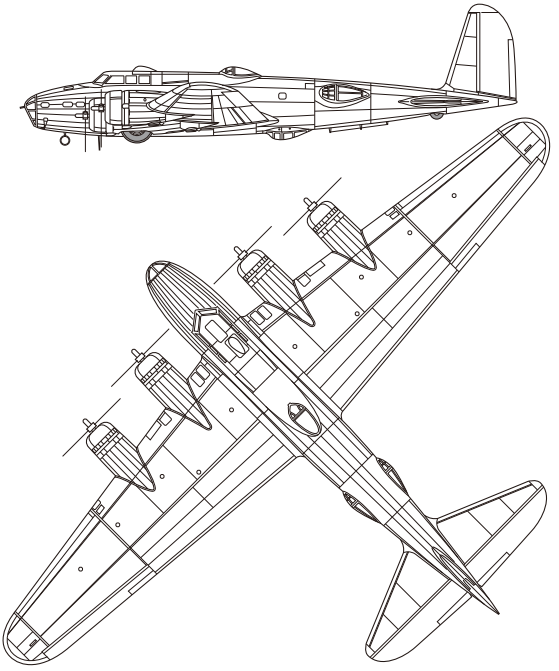
「行くぞっ、空の要塞！」

一声叫び、諏訪は再び突進した。

二〇ミリ機銃の射程内に入る前に、多数の火箭が飛んで来る。今度は胴体上面と左側方の機銃座だ。

機銃が左右に振り回され、おびただしい曳痕が放たれる。銃撃というより、銃弾をばら撒いているようだ。七・六二ミリの小口径機銃とはいえ、数が揃えば大きな脅威になる。

アメリカ陸軍 ボーイング B17B



全長	20.7m
翼幅	31.6m
全備重量	21,546kg
発動機	ライト R-1820-51 1,200馬力×4基
最大速度	470km/時
兵装	7.62mm機銃×5丁／爆弾 5,440kg(最大)
乗員数	8名

ボーイング社が開発した長距離爆撃機。当初は、アメリカ合衆国がもつ長大な海岸線を守るための機体として研究が始まった。その後、敵陣深く進攻、目標に爆撃を行う戦略爆撃機として開発が続けられ、1935年７月28日に原型試作第一号機が完成した。その後も数々の改良が加えられ、エンジンに排気タービン過給機を備えた「B型」が初の量産型として発注された。「空の要塞」との異名が示す通り、強力な装甲を備えており、防御火力も今後の増強が予想されることから、日本軍の難敵になると予想される。

（ままよ！）

当たるなら当たれ――その覚悟を決め、諏訪はB17に突進した。照準器の白い環に左主翼を捉え、発射把柄を握った。

二条の太い曳痕がほとばしり、狙い過たず一番エンジンに突き刺さる。

太く巨大なエンジン・ナセルの後方に、真っ赤な火点がまつわりつくように見える。

諏訪は操縦桿を左に倒し、離脱する。零戦が左に旋回し、B17の巨大な機影が右に流れる。

二、三番機が、続けて銃撃を浴びせる。

エンジンといわず、翼の上面といわず、二〇ミリ弾が突き刺さる。

「今度も駄目か！」

永瀬機が離脱したところで、諏訪はB17を見、唸り声を発した。

二度目の銃撃も効果は認められない。B17は、依然飛行を続けている。

三小隊が攻撃した機体も同じだ。

四機のB17は一機も落伍することなく、トラックの上空を飛び続けている。

春島、夏島の上空は既に通過し、現在は冬島の上空にかかっている。

飛行場が爆撃を受けた様子はない。火災煙らしきものはどこにも見られない。

（偵察か）

諏訪は、敵の目的を察した。

B17は、トラック攻撃の下準備のため、偵察に来たのだ。泊地や飛行場の様子が、何枚もの写真に収められたに違いない。

「そうはさせるか！」

吐き捨てるように、諏訪は叫んだ。

奴らをこのまま帰せば、トラックは丸裸にされる。その危機感に駆られ、B17群を追った。

冬島が死角に消え、南水道の上空を通過する。ここから先は、外海だ。前方には、海原がどこまでも

続いている。
諏訪は顔を上げ、前方を睨んだ。
一旦遠ざかったB17が、再び接近する。
諏訪は、真下からB17群を追い抜いた。
右上昇反転をかけ、敵機の前上方に占位した。
これが最後――その思いを込め、B17との距離を一気に詰めた。
旋回機銃座から無数の曳痕が放たれ、何発かが胴体や主翼をかすめて鋭い音を立てる。
諏訪は、委細構わず突っ込んだ。
「墜ちろ！」
その叫び声と共に、二〇ミリ弾を叩き付けた。
両翼からほとばしった真っ赤な火箭が、今度は前からB17の左主翼に突き刺さる。諏訪が左旋回をかけて離脱するや、安西、永瀬が続く。
香取空曹長の第三小隊も、二小隊と同じ機体を攻撃する。B17は、恐ろしく頑丈な機体だ。目標を分散するより、一機に集中した方がよいと、香取は判断したのだろう。
最後の一機――三小隊三番機を務める加藤慎次一等航空兵の零戦が銃撃を終え、離脱したとき、諏訪は六機による集中攻撃の成功を悟った。
B17は黒煙を引きずりながら、高度を落としている。
操縦員は、何とか味方に追いつこうとしているであろうが、僚機との距離は開くばかりだ。
やがて、B17の左主翼で爆発が起きた。
エンジン・カウリングが吹っ飛び、左主翼全体が炎に包まれた。機体が大きく左に傾き、真っ逆さまに墜落し始めた。
六機の零戦は、ようやく「空の要塞」一機を仕留めたのだ。
「ここまでだな」
諏訪は、残る三機のB17を見送りながら呟いた。
諏訪は、最後の攻撃で二〇ミリ弾を撃ちつくした。他の五機も、二〇ミリの残弾は乏しいはずだ。

機首の七・七ミリ機銃はほとんど撃っていないが、二〇ミリ弾でも容易に墜とせないB17を七・七ミリ弾で墜とせる道理がない。

（完敗だ）

諏訪はそう悟った。

戦果は一機撃墜、味方の被撃墜機はない。

数字の上では勝利と言えるが、B17にトラック上空への侵入と偵察を許してしまった。

敵に情報を持ち帰られてしまった以上、敗北を認めざるを得ない。

諏訪は、背筋に冷たいものを感じた。

B17が大挙して来襲したら、トラックを守り切れるのだろうか、と。

2

この時期、連合艦隊司令部は、広島県呉の鎮守府に仮住居を置いている。

昨年一〇月のサイパン島沖海戦の結果、旗艦に使用できる戦艦がなくなってしまったのだ。

それまでの旗艦「伊勢」は推進軸を損傷したため、ドックに入っており、戦艦「日向」「山城」は米戦艦との砲戦で沈没した。

「扶桑」は直撃弾を受けることなく帰還したが、多数の至近弾によって複数箇所に浸水があり、水線下や艦内隔壁の修理、補強が必要になっている。

金剛型戦艦四隻は、次期作戦に備えて整備中だ。

「空母か巡洋艦を旗艦に定めては？　特に空母は戦艦に代わり得る主力となるのですから、連合艦隊旗艦に相応しいと考えます」

このような意見もあったが、司令長官山本五十六大将は、

「今は東郷長官（東郷平八郎元帥。日露戦争時の連合艦隊司令長官）の時代とは違う。昭和の海戦は、航空機という要素も加わり、日露戦役の頃に比べて遥かに複雑になっている。GF長官が陣頭指揮を執り、

先頭切って敵艦隊に突っ込んでゆく時代ではないのだ。セイロン島沖、サイパン沖と、二度の水上砲戦を経験して、そのことがよく分かった」

と言い、司令部を陸上に移したのだ。

「連合艦隊が、将旗を陸上に掲げるとは」

という批判もあったが、山本は、

「今は、伝統などにこだわっている時ではない。米海軍は、太平洋艦隊の司令部をオアフ島の陸地に置いている。近代海軍としての歴史は我が軍よりも古いが、伝統にこだわらぬ柔軟性を持っているのだ。今後のことを考えれば、GF司令部は海軍省や軍令部と同居してもいいぐらいだ」

と主張し、譲らなかった。

その連合艦隊司令部に、トラックの第四艦隊司令部から緊急信が届いたのは、一月一八日の朝だ。

第一報は、「敵四発重爆、『トラック』ニ来襲セリ。一〇〇六」と伝えたのみだったが、午後になってから詳報が届けられた。

「〇九五二、『薄島監視所』ヨリ『敵機発見。四発重爆撃機四機』ノ報告アリ。位置、『夏島』ヨリノ方位一八〇度、二〇浬。高度六〇。〇九五七、戦闘機六機、『竹島飛行場』ヨリ発進。敵一機ヲ撃墜セリ。敵機ハ『春島錨地』『春島』『夏島』上空ヲ通過ノ後、一〇二七ニ離脱セリ。空襲ニヨル損害並ビニ未帰還機ナシ。猶、敵機ハ『B17』ト認ム。一三二八」

昨年一一月、田村三郎中佐に替わって通信参謀に任じられた和田雄四郎中佐が報告電を読み上げると、張り詰めていた空気が和らいだように感じられた。

トラック環礁は、日本の参戦前から艦隊泊地として整備され、本土以外では最も重要な基地となっている。

マーシャル諸島が米軍の手に落ちてからは最前線となり、守りが固められていた場所だ。

「空襲ニヨル損害ナシ」の一文は、ひとまず司令長官以下の幕僚を安堵させていた。

「敵機の飛行経路は、このようになります」
航空参謀日高俊雄中佐は、トラックの地図上に描き込んだB17の飛行経路を机上に広げた。
一昨年五月、連合艦隊初の「航空参謀」に任じられてから一年八ヶ月が経過している。昨年一一月、中佐に昇進し、徽章の桜は二個に増えた。
俸給が上がったのは有り難いが、
「これで、飛行機の操縦桿は握れなくなった」
との失望もある。
欧米では、大佐、中佐の飛行隊長も珍しくないが、日本海軍では中佐まで昇進したら、搭乗員として勤務する機会はほとんどないからだ。
「敵の目的は爆撃ではなく、偵察だったと考えられます。敵機がトラックの枢要部を舐めるような形で飛行したこと、敵機の数が僅か四機だったこと、飛行高度が六〇〇〇と高めだったことが、それを裏付けています」
「航空参謀の言う通りでしょう。敵機の目的は、トラックにおける兵力の配備状況、及びトラックの防空態勢を探ることにあったと考えられます」
作戦参謀の三和義勇中佐が日高に賛同した。
和田通信参謀と共に、新たに連合艦隊司令部に迎え入れられた幕僚だ。日高と同じ航空の専門家だが、現場一筋の日高と異なり、海軍大学の甲種学生を修了している。
「敵の目的以上に気がかりなのが、敵が侵入して来た方角だ」
参謀長の福留繁少将が言った。
「敵は、マーシャル諸島全域を占領下に置いている。この状況を利用するなら、B17はエニウェトクを基地とし、トラックの東方から飛来するのが自然ではないのか？」
「米軍は、B17の安全を考えたのではないでしょうか？」
日高が、三和に代わって発言した。
机上に広げられている南方要域図に指示棒を伸ば

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はＰＤＦ
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。